https://endtransplantabuse.org/wp-content/uploads/2025/02/Professor-Yuan-Statement-Transcript.pdf
（以下は英語の翻訳からの邦訳）
中国語映像はこちら：https://www.youtube.com/watch?v=l4ZQ1rl0dX8

袁紅冰教授による声明

（この後に Q&A あり）

習近平国家主席が出席した中国共産党内部会議の内部告発情報

中国共産党が海外の法輪功修煉者に対する攻撃を強化

袁紅冰（ユアン・ホンビン）教授について

国際的に著名な中国系オーストラリア人の法学者、小説家、そして中国の反体制活動家である。1994 年、中国における民主主義支持の姿勢を理由に不当に投獄された際、アムネスティ・インターナショナルおよびヒューマン・ライツ・ウォッチがその釈放を求めて活動した経緯がある。The Age、Sydney Morning Herald、ABC、China Scope など多数のメディアにも彼の言葉は引用されている。袁教授はこれまでにも、台湾立法院を標的とした中国の統一戦線の戦略や、海南自由貿易港に関する中国共産党の戦略など、内部情報を公表してきた。1989 年 6 月 4 日の天安門学生民主化運動では、積極的な支援者でもあった。

中国の名門・北京大学で 16 年間学び、法学教授として教鞭も執り、その後は貴州師範大学法学部の創設者として 10 年間教授を務めた。北京大学在任中には、高級判事や高級検察官の養成も担当した。教員時代に指導した学生は数千人にのぼり、その多くや元同僚は現在、中国共産党体制内の公安機関、検察機関、人民法院、司法制度や国家安全部など重要部門で幹部職に就いている。

声明

2022 年、中国共産党第 20 回全国代表大会の前に、中国共産党中央政法委員会が拡大会議を開催した。この会議には政法委員会書記、副書記、委員、事務総長に加え、公安部、国家安全部、外交部、統一戦線工作部の職員も出席していた。習近平国家主席も出席した。

内部告発者からの漏洩情報

この会議で、習近平は演説の中で多くの重要な点に言及した。第一に習近平は、「法輪功」への国際的な弾圧は、第 18 回党大会以前はほとんど失敗だったと述べた。

> **袁教授の個人的なコメント**
>
> この「第 18 回全国代表大会」という時間軸にぜひ注目してほしい。第 18 回大会は、習近平が党の最高指導者となった時期である。したがって、習近平は明確に「それ以前の江沢民・胡錦濤時代には、海外での法輪功弾圧は失敗だった」と述べている。つまり、海外での弾圧・抑圧は失敗に終わった。この失敗の具体的な表れとして、習近平は、法輪功が中国共産党によって国際的に根絶されなかった点を挙げている。むしろ、

> 法輪功修煉者が創設したメディアや文化団体が国際社会で非常に活発である。それは中国語圏に留まらず、英語圏でも同様である。「彼らは中国共産党の最も顕著な反対勢力に成長した」――これが習近平の言葉である。

さらに習近平は、これまで「法輪功」弾圧が失敗に終わった理由を説明した。一つは、「法輪功」弾圧の全体戦略、抑圧・戦略計画において中国共産党内部の各部門間で有効な連携がなかったことである。

また、国外での「法輪功」弾圧に用いられた方法があまりにも保守的・伝統的で、創意や革新性に欠けていた点も挙げた。習近平は、従来の中国共産党の「浸透」「分断」「瓦解」という手法では「法輪功」を打倒できなかったことが事実によって明らかになったと指摘した。

第三に、海外での法輪功弾圧が失敗した主な理由として「巨額の資金を投入したにもかかわらず、実際にはその多くが浪費され、一部は着服されていた」ことを強調した。習近平は、「中国共産党中央規律検査委員会がすでに着服についての情報をある程度、把握している」とも述べた。

習近平は、今後、海外での「法輪功」弾圧活動に携わる人員の大幅な入れ替えと再編成を命じた。つまり、罷免すべき者は罷免し、法輪功を国際的な標的とするための強力な調整・執行機関を再編成すべきであることを明示した。

習近平は「国際的な規模で徹底的に法輪功の勢いを抑えよ」と指示した。具体的な計画として、海外の法輪功対策には新しい組織体制・協調メカニズムが必要であり、これまで国内外ともに法輪功の弾圧は中国共産党中央政法委員会が主導してきたが、再編成後、第 20 回党大会前の調整によって、国内での弾圧は公安部が主導する体制に、海外での弾圧は国家安全部が主導する体制に変わることになった。

さらに習近平は、「法輪功」の勢いを国際的な規模で徹底的に抑えていくよう命じた。具体的な計画として、海外での「法輪功」対策活動のために新たな組織体制と調整メカニズムを構築する必要があるとした。これまでは、国内外の「法輪功」弾圧は主に中国共産党中央政法委員会が主導していた。

再編後に、第 20 回全国代表大会前に行われた体制調整の結果、国内での「法輪功」弾圧は主に公安部が担当し、国外での弾圧は主に国家安全部が担当するようになった。この会議の当時、陳一新は中央政法委員会の事務総長だったが、党大会前には王小洪が公安部長、陳一新が国家安全部長になることが内々に決まっていた。第 20 回党大会後も、海外の「法輪功」弾圧は主に国家安全部（陳一新）が調整役となることがこの会議で確認された。

具体的な実施計画について、習近平は「一点集中・二つの基本方向」という指示を出した。この「一点集中」とは、「法輪功創始者およびその家族をターゲットにすること」を意味する。習近平の認識では、第 18 回全国代表大会以前に海外の法輪功弾圧が効果を発揮しなかった最大の理由は、この焦点を外していたことにあると考えている。したがって、「一点集中」とは、法輪功創始者への人格攻撃を狙い、あらゆる形の中傷や攻撃を加えることを意味する。

「二つの基本方向」とは、世論誘導と法的戦術である。世論誘導では、中国共産党の公式組織による「法輪功」への言及を控え、党への立場が曖昧なメディアや個人メディアに「法輪功」攻撃を担わせることで、より効果的に世論操作を行うとした。

また、世論誘導のもう一つの重点は、「法輪功」が運営するメディアを内部から混乱させることである。過去の演説で習近平は、これまで「法輪功」への浸透による情報収集には実質的な価値がなかったと述べており、今後は「法輪功」系メディアの分断・瓦解・撹乱を引き起こすべきだとしている。これが世論誘導の二側面である。

法的戦術としては、アメリカ、台湾、その他の国々の訴訟制度を活用し、法的手段で「法輪功」への攻撃を展開するというものだ。この情報を入手したのは 2024 年 9 月である。

情報源は誰か? この漏洩情報はどこから来たのか?

この情報は二つのルートから得ている。一つは中国共産党体制下の「良心ある人々」である。彼らは共産党の全体主義・専制体制に強い政治的不満を抱き、「中国民主化」を志向している。私は彼らを「体制内良心者」と呼ぶ。ただし、この種の情報は公表前に必ず他のルートでも検証する必要がある。私はさらに中国共産党「紅二代」（中国共産党幹部の子弟）からも確認を得た。紅二代の中には、現在かなりの数にのぼる「紅二代」の中には、習近平による政治的粛清の対象となった者もあり、習近平の個人独裁により、江沢民時代のように「紅二代」が権力を分有できなくなったことに不満や憎悪さえ抱く者もいる。私はこれら「紅二代」を通して情報の検証を行った。

情報全体の出所については、冒頭で述べた通り、私には中国共産党体制内に今も有効なコネクションが存在する。

内部情報に関しての袁教授による個人的見解

さらに個人的な所感を加えたい。中国共産党体制内の良心的な人々から私が得た情報によれば、習近平は海外の法輪功に対して徹底した弾圧・抑圧・迫害を計画している。21 世紀を通じて行われた人権侵害の中でも、中国共産党によるこうした人権侵害こそ、国際社会が最も注視すべき問題である。習近平による海外での法輪功弾圧の背景には複数の要素がある。

第一に、暴虐な中国共産党は、政治マフィア集団として振る舞い、東アジア大陸のさまざまな国々に対して一連の許しがたい人道に対する罪を犯してきた。中国共産党の専制の下で、政権掌握以来、異なる民族の人々のうちすでに約 1 億人が不自然な死を遂げている。中国共産党が引き起こした一連の人権・社会的災厄の中で、人々は不自然な死を遂げたのである。軍事弾圧の下で直接殺された者もいれば、拷問によって命を落とした者もいる。中国共産党は反人類的な暴力集団である。

第二に、習近平が権力を握って以降、「共産主義全体主義」の世界的拡大を推進しており、これが人類社会全体への重大な脅威となり、自由・民主的な生活様式に深刻な危機を与えている。習近平自身が世界の平和と人類の安全そのものへの直接的な脅威である。

第三は、法輪功の問題である。中国共産党による法輪功への弾圧は、21 世紀で最悪の人権災厄の一つである。それには、中国共産党による海外における法輪功への新たな弾圧、特に法輪功に対する「法律戦」や「世論戦」も含まれている。

自由・民主主義社会の一部メディアが、驚くべきことに中国共産党の道具となり、法輪功を中傷・攻撃し、さらに民主主義国家の司法制度を利用して法輪功を迫害しようとしている。これは国際社会が最大限に警戒すべき事態である。

自由で民主的な社会における一部のメディアが、驚くべきことに、法輪功を中傷し、攻撃し、弾圧することによって、中国共産党の専制の道具に成り下がってしまっている。また彼らは、民主国家の司法手続きを利用して、さらに法輪功を迫害しようともしている。これは国際社会が非常に警戒すべき事柄である。

この現実を直視する必要がある。現在、法輪功修煉者が運営しているメディアや各種文化事業（たとえば神韻芸術団）は、単なるメディアや文化団体ではない。「21 世紀における人類が自由と民主、そして中国共産党独裁の血なまぐさい弾圧に抗して立ち上がる壮大な人権運動の一部」である。ゆえに、法輪功系の海外メディアや文化団体が習近平や中国共産党政権の怒りを買っているのである。われわれが中国共産党のこの陰謀を暴露することで、国際社会が中国共産党の存在そのものが「人類全体の自由と民主の大義」に対する直接的な脅威であることを、より一層認識できることを願う。

私たちは、この基本的な事実を認識しなければならない。それはつまり、現在、法輪功の学習者たちが運営しているメディアや、神韻芸術団を含むさまざまな文化活動は、通常の意味でのメディアでも文化イベントでもないということである。それらは、人類が自由と民主主義のために戦い、中国共産党の専制とその血塗られた迫害に立ち向かうという、21 世紀における偉大な人権運動の欠かせない部分である。だからこそ、法輪功の海外メディアや文化団体は、習近平および中国共産党の専制政権の怒りを買っているのである。中国共産党の陰謀を暴露することを通じて、中国共産党の存在そのものが「人類全体の自由と民主主義の大義」に対する直接的な脅威であるという事実を、国際社会がより深く認識できることを願っている。

Q&A 袁教授との質疑応答

海外メディアに影響力を及ぼす中国共産党の手法とは？

中国共産党は主に、資金による贈賄で海外メディアの中核人物（編集長、記者、有名ジャーナリストなど）を取り込み、浸透を図っていると思われる。「海外統一戦線工作資金」という名目で予算を組み、各国のキーパーソンに直接金銭を支払っている。つまり、このメディア工作、世論誘導の本質は「要職記者や編集長、経営幹部を金銭によって買収すること」に他ならない。

一部の人は、「中国事情にうとく、知らずに中国共産党の虚偽情報拡散に加担している記者や編集者もいる」と考えるかもしれないが、私は「虚偽情報の拡散は偶発的な世論操作の産物ではなく、すべて中国共産党による買収の結果」だと見解する。

法的観点から見た「法輪功」とは？

法的観点から言えば、古代ギリシャのアリストテレスの時代にすでに「良い法・悪い法の区別」がなされたという。良い法は人間社会に必要であり、慈愛にもとづき従うべきもの。悪い法は本質的な法的拘束力はなく、従う必要はない。中国共産党体制下の法律は、専制的な悪法の典型であり、本質は「専制体制の維持」と「信仰の自由の剥奪」に他ならない。中国（東アジア大陸）全体が現代のバスティーユ牢獄のごとき状況で、「苛酷な専制法治」によって支配されている。

法輪功の中国社会全体への最大の貢献は、まず、信仰活動を通じて中国人に「思想の自由」と「精神の自由」の大切さを強く訴えた点にある。この「信仰の自由」こそ、人間の持つべき最も基本的な人権の一つである。法輪功が中国共産党に弾圧されているのも、この基本的人権を守ろうとしてきたからである。私が見るところ、法輪功による中国の行く末に対する最大の貢献は、法輪功が単に信仰の自由を擁護するだけではなく、中国共産党が 70 年以上にわたり中国

を統治してきた全期間を通じて、唯一、貫き続けることができた勢力であることだ。中国共産党が国家権力のすべてを投入しても、法輪功を根絶することはできなかった。彼らは中国の人々に、中国共産党の専制に立ち向かうとはどういうことか、その手本を示したのである。信仰の自由を追求するということの偉大な模範であると思われる。そしてこれこそが、法輪功の最も重要な貢献であると思う。

「法輪功は邪教かどうか」に関する法的見解は？

中国では中国共産党の暴虐な支配下において、現在存在を許されているいかなる宗教も事実上、中国共産党に精神的に従属し、基本的に「精神的奴隷」となっている。これらの宗教はすべて中国人民を支配するための道具へと変質させられており、精神的支配のための道具となっている。

現在、極めて滑稽な現象が起きていることは誰もが知っている。たとえば仏教寺院では習近平主席の肖像画を掲げることが義務付けられている。中国共産党体制下で人工的に作り変えられたキリスト教、カトリック教、イスラム教、仏教のいずれであっても、実質的に「中国共産党が中国人民を支配のための道具」と化している。専制体制の下で、真に純粋な宗教が存在することはない。

こうした過酷な状況下で、法輪功は突如現れ、急速に発展した。その理由は、法輪功が提唱する「信仰の自由」「精神の自由」の理念が中国の人々から広く支持されたからである。中国において、まさに信仰の自由という理念を堅持しているがゆえに、法輪功は中国共産党の先生による弾圧に屈しなかったのである。中国共産党は国家のあらゆる宣伝機関を動員し、法輪功を組織的に弾圧・破壊するだけでなく、精神的にも破壊も試みてきた。法輪功を「邪教」と決めつけたのは、中国共産党の支配を維持するためのプロパガンダ機関である。この意味において、邪教であるのは中国共産党そのものであり、法輪功は「信仰の自由」の支持者であり擁護者である。

袁教授自身は法輪功の修煉者ですか？

私は法輪功修煉者ではない。ただ、法輪功の「信仰の自由」を求める運動を支持している。20年ほど前、この立場で「法輪功を弁護する」という記事を書いたことがある。当時、法輪功は中国共産党によって買収された学者たちによって一連の攻撃を受けていた。記事の中で「法輪功迫害こそが 21 世紀における最悪の人権災厄の一つである」ことを明確に指摘した。このような未曽有の人権災害に直面した時、良心ある者は誰しも、中国共産党による法輪功への弾圧の理由とその残酷な真実を告発せねばならない。

私が法輪功支援の立場をとるもう一つの理由は、中国共産党が国家総動員で信仰を抱くコミュニティーを潰そうとしたが失敗したことにある。法輪功が成長し続けている事実は、中国共産党専制の失敗を証明している。そしてこのような迫害下でも法輪功修煉者が屈せずに立ち続けていること――これが私を深く感動させる最大の理由である。彼らは「信仰の自由のために己を捧げる強靭な精神」の持ち主である。私は、法輪功修煉者がどのようにメディアを立ち上げ、長年無私の奉仕で発展させてきたかを自ら見てきた。したがって、法輪功の大義の支持と信仰の自由の擁護は、中国の自由と民主化の未来に希望をもたらす。

袁教授による中国内部人脈に関する声明

私は北京大学で 16 年近く学び、教鞭を執った。北京大学法学部で訴訟学の教学研究セクションの主任を務めていたが、主任という肩書はなく、私が実質的な責任者であった。北京大学在籍時、約 600 人の学部生を指導した。1989 年 6 月 4 日の民主化運動（天安門事件）を支持した

ことで、私は中国共産党の弾圧を受け、左遷されて貴州師範大学に赴任し、そこで 10 年間教鞭を執り、法学院の創設学部長を務めた。貴州師範大学では学術委員会の委員および大学院指導教員も務め、学部生・大学院生合わせて約 1,000 人を指導した。

北京大学在職中、私は高級検察官養成・法学研修プログラムおよび高級裁判官法学研修プログラムの主要教員を務めた。また、北京大学で教鞭を執っていた間に、北京大学法学部と中国武装警察部隊総部が共同で教育プログラムを実施し、武装警察部隊の幹部に対して法学研修を提供した際にも、私は「刑事訴訟法」および「中国の司法制度」の科目における主要教員であり、教科書の執筆者でもあった。上記のプログラムにおいて、私が直接授業を行い、指導した社会人教育の学生は数千人に及ぶ。

こうした学部生や成人教育の学生の多くは現在、中国共産党体制下の公安・検察・人民法院・国家安全部・政法委員会等の各部署で勤務している。

さらに、私が北京大学法学部で学んでいた頃の同級生の多くも、現在中国共産党のシステム内で非常に重要な公職についている。例えば、現在中国共産党統一戦線工作部の部長である石泰峰、粛清された元公安部副部長の孟宏偉、引退した最高人民法院副院長の黄爾梅、粛清された最高人民法院副院長の奚暁明、それから薄熙来の妻（私の同級生）などが挙げられる。薄熙来については誰もが知っている通り、中国共産党によって粛清された。そのほかにも大勢いる。これらはすべて私の北京大学法学部時代の同級生であり、今では皆、中国共産党の政府および党部門の高位に就いている。

私の教え子の大多数は党・政府体制の要職にあり、また北京大学時代には同窓の人脈も数多く築いた。例えば、現・党中央宣伝部長の李書磊、元国務院副総理の胡春華、現・中国人民政治協商会議の副主席であり、党中央統一戦線工作部に関連する要職にある人物などである。他にも薄熙来の妹の薄小瑩は、私の北京大学時代の同僚で、彼女は歴史学部、私は法学部で教鞭を執ったが、学術的なつながりがあった。このような人物は他にも大勢いるので、ここでは挙げきれない。

具体的に名を挙げたのは、この情報を受け取る方々に、私がいまも中国共産党体制の内部に多くの友人や知人、同級生がいることを理解してもらうためである。もちろん、私が開示した情報がこれらの特定の人物から来たということを意味するものではない。

さらに、北京大学に在学・在職していた時期には、多くの紅二代と共にあった。その中には元中国最高指導者・鄧小平の長男である鄧樸方も含まれる。私には非常に多くのコネクションがある。また、中国共産党制度内のリベラルの知識人とも非常に密接なつながりがあった。例えば、当時の党中央宣伝部部長であった朱厚沢、人民日報の秦川編集長、[副]編集長の王若水、中国の著名な芸術家である呉祖光、毛沢東の秘書であった李鋭、有名な自由主義知識人の鄭仲斌や張顕揚などである。このような人物は他にも大勢いるので、ここでは挙げきれない。

私が中国共産党紅二代の人々と接触したこと、そして共産党システム内の有名な自由主義知識人たちと交流してきたことについては、自著の自伝の中で触れている。このことに関する情報はある程度記載しているが、もちろんすべてを書いているわけではない。

以上のことを述べた理由は、私には党体制内に多数の情報ルートがあることを理解していただくためである。特に習近平が 12 年間にわたり中国共産党を率いるなかで展開した一連の逆行的行為により、体制内部の官僚たちが憤りと不満を抱くようになってきた。そのため体制内部から国際社会に情報を流すことに積極的な者も少なくない。習近平の個人独裁体制の早期崩壊に役立つことを望んでいるのである。これが、彼らが情報を外部へ送り出す心理的動機である。